

141. 昭和60年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

昭和60年3月8日、恒例の県下発掘調査スライド大会が滋賀県埋蔵文化財センターで実施された。

県下では年を追うごとに調査件数が増加し、60年度では立会調査も含めて約450件近くの調査が実施された。今回のスライド発表件数は、このうちの50件程度であるが、いずれも注目すべき調査で、60年度県下の発掘調査動向を知り得る貴重な時間となった。

また、発表者の方々は、日頃、何かと多忙の中にあつて当該紙面への寄稿をお願いしたが、これは、県・協会はもとより、市町村間の情報交換が十分にできないこと、スライド大会に参加できなかった、より多くの方々に少しでも広く知って頂くことを目的とした当紙の責務を御理解いただき、ご容赦願えれば幸いである。

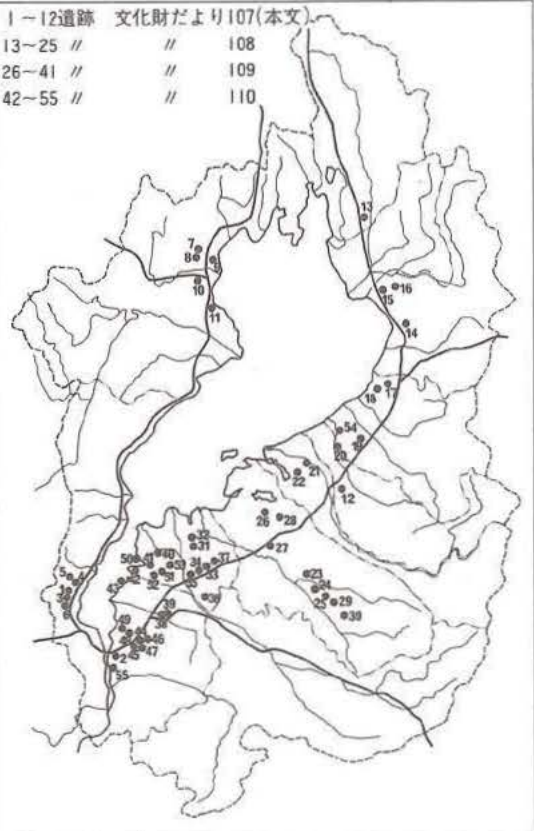
1. 縄文時代晩期の土壌群と蛇文岩製勾玉 大津市立ヲサ地区 滋賀里遺跡

滋賀里遺跡は、琵琶湖西岸南部に位置し、縄文時代後晩期から平安時代にいたる大規模な集落・墓地遺跡である。特に縄文時代晩期の資料は、近畿地方における標識遺跡として知られている。

今回の調査地は、京阪電鉄石坂線滋賀里駅の東南方約350mに位置し、昭和46年に湖西線建設に伴う発掘調査によって多数の土壌墓や甕棺墓が検出された地点と道路を挟んで南接する。倉庫建設に係る調査範囲は約120㎡が対象となった。

調査の結果、トレンチの東北部では、平均の長さ1.1m、幅0.5~0.6m、深さ0.2~0.5mを測る楕円形を呈する土壌墓7基(屈葬人骨が遺存するもの1基を含む)が集中的に認められ、主軸は概ね南北であるが若干東方に振れるものが6基、残りの1基は東西に主軸ラインをもつ。また1基の土壌内からは、蛇紋岩製の勾玉1点が副葬されていたものがみられた。トレンチの中央部より若干西寄にて、西北から東南に流入する溝状遺構が2条確認された。1本は、溝幅3.4m、深さ約0.3~0.5mを測り、他は、最大幅3.8m、深さ約0.5m

1~12遺跡	文化財だより107(本文)
13~25 //	// 108
26~41 //	// 109
42~55 //	// 110



遺跡位置図 (位置図の番号は本文と同じです。)



甕棺墓

のものであった。土壌内の土器（甕棺を含む）は滋賀里Ⅴ式、溝状遺構のそれは滋賀里Ⅱ式を主としていた。また、調査地の遺物包含層全体（溝状遺構に集中）からはサヌカイト製の石鏃32点、黒曜石製の石鏃1点が出土した。他に石鏢2点、獣骨などもみられた。

土壌墓・甕棺墓群の検出は、昭和46年当時の調査地点から西へ約15m拡張されるものであり、勾玉は滋賀里遺跡が二例目にあたる。蛇紋岩の産地は周辺では丹波大江山・伊勢・志摩地域であり、黒曜石は八ヶ岳・隠岐島等である点、原産地を確認することによって当時の交易の様子がうかがわれる貴重な資料となりうるであろう。（大津市教育委員会 吉水 真彦）

2. 古代から中世をつなぐ集落跡

大津市大江 西ノ宮遺跡

西ノ宮遺跡は国府跡の中軸線にのって北上する道路と国道一号線が交差する付近に位置しており、丘陵の先端から湖岸低地にかけてひろがっている。

調査地点は、市立瀬田小学校とは東を、瀬田市民センターとは南を接する地点にある。

調査により、掘立柱建物12棟、井戸5基、土塋6基（うち一基については、壁面が赤く焼け締っており、底部には灰が残る）、溝6条を検出した。

検出した遺構のうち特筆すべきものの1つは井戸である。その中の1つは検出面で5m×4mの楕円形のプランで掘鉢状に1.5m掘り、そこから直径2.0m、深さ約2.5mの円柱状に、さらに掘り込んでいる。その底面に横板を方形に組み（検出時には南側部分は欠損していた）、その中に直径0.6m、高さ0.3mの曲物の井筒が2段に設置されていた。井戸の掘方にそって、柱跡がめぐっており、覆屋があったものとみられる。なお、この井戸は現在でも使用できる湧水量があった。

別の1つは、3.5m×3.0mの方形プランで深さ1.16mあった。しかし、検出した井戸のすべてが、湧水地点まで達していたのに比して、浅いことから、水溜めの施設とも考えられる。この井戸からは排水施設的な溝が低位方向に伸びていた。

また、掘立柱建物のうち1棟は廂をもっていた。遺構に伴い遺物も出土した。その中には土師皿をは

じめとして、緑釉陶器、瓦器、信楽焼などの土器と木器等が出土した。珍品としてはろうそく立てがあった。

この遺跡は、近江国府に接した位置にあること、時期的にみて、平安時代末から室町時代に比定されることから国府の変遷及び大江付近に存在していた大江庄解明に資料を提供するものであろう。

（大津市教育委員会 須崎 雪博）

3. 竪穴式住居跡の上に古墳

大津市滋賀里 大谷遺跡

調査地は、京阪電鉄石坂線滋賀里駅の北約600m、標高116～120mを測る山麓部に位置する。

調査は、防衛施設局の大津宿舎建設に伴うもので、建設予定地約4,200㎡を対象として昭和60年6月10日から約2か月間にわたって実施した。

これにより検出した遺構は、古墳時代初頭の竪穴式住居跡3棟と6世紀中葉の古墳3基などである。竪穴式住居跡は、いずれも南東部が流失しており全容は明らかでない。手焙形土器、高杯、壺、甕がほぼ完形に近い形で出土している。古墳の規模などについては別表に示すとおりである。

これらの住居跡、古墳のうち一組が重複して検出された。これは時期が異なるのであるから少しも不自然ではないが、珍しい例としてあげられよう。

以上が調査の概要である。当初、出土する遺構は周辺の遺跡の種類から後期古墳であろうと予測していたが、今回の調査により今までに確認されていなかった古墳時代初頭の竪穴式住居跡の存在が明らかになったことが成果であり、またこれに係る墓域の位置（国鉄湖西線付近で検出される方形周溝墓か）がどこであったかが検討を要する。

古墳番号	開口方向	形態	掘形全長	掘形幅	支室長	支室幅	羨道長	羨道幅	出土遺物
大谷36号墳	南々西	?	?	2.2m	?	1.0m	?	?	須恵器壺、釘
大谷37号墳	南々東	右片袖式	?	2.7m	2.8m	2.0m	?	1.3m	須恵器杯身・杯蓋・壺、土師器壺、釘
大谷38号墳	南	?	?	1.9m	?	0.95m	?	?	釘

（大津市教育委員会 栗本 政志）



調査地全景



井戸



調査区全景

4. 竪穴式住居跡と中世の石垣を検出

大津市弥生町 穴太遺跡

調査地は、京阪電鉄石坂線穴太駅の南西約500m、標高102~108mの緩傾斜面に位置する。今回の調査は、一般国道161号西大津バイパス建設に伴う試掘調査であり、この建設予定地12,000㎡を対象として昭和60年9月17日から約4か月間にわたって実施した。

これにより検出した遺構は、奈良時代の竪穴式住居跡2棟、溝7条、土壇2基、中世の石垣1か所などである。いずれも残存状況は悪いが、2棟の竪穴式住居跡の規模は、5.5m×4.0m以上と3.5m以上×2.3m以上である。後者については壁溝のみの確認で、主柱穴等は設定トレンチ外にあたるため詳細は不明である。溝のうち1条は、幅5.5mと広く、この溝の南側には遺構が認められないことから集落跡の南限になるものと考えられる。土壇のうち1基は、直径0.6mほどの不整形で、焼土・炭とともに土師器の甕が出土している。石垣は東面し、1段~2段の残りであるが、崩落したとみられる石材が周囲に散在する。

出土遺物は、須恵器・土師器・青磁・土師皿が主であるが、これらの他に石帯(丸柄)が1点出土している。この石帯は遺構の全くみられない調査区からの出土である。西方高所から流れ込んだものと考えられる。

以上が調査概要である。今回の試掘調査では、穴太遺跡の南限をおさえることができたことと、今まで知られていなかった中世の遺



第1トレンチ全景



石垣

構の存在も確認できたことが大きな成果としてあげられる。

(大津市教育委員会 栗本 政志)

5. 穴太廃寺東西寺域の調査

大津市穴太 穴太遺跡

今年度は、穴太廃寺(昭和59年度主要伽藍調査)の東および西寺域外郭施設の確認と、同周辺部の寺院関連遺構その他の確認を主な内容として、調査を実施している。

東寺域調査区東端部では、幅2.5~3m、長さ32m以上にわたる築地状遺構を検出した。創建寺院中軸線から東へ90mの地点に位置し、創建寺院造営を契機に東寺域を画する施設として築造された可能性が高い。再建寺院外郭施設については、明確な遺構は認められないが、現状の南北方位を有する畦畔・里道に重なってなんらかの施設が設けられていたものと思われる。再建寺院中軸から東へ約128mを測る。同調査では他に、再建寺院と同一方位を有する東西の石組溝(内法幅50cm、長さ6m以上)などを検出している。

西寺域調査区では、再建寺院中軸線より西へ約101mの地点で、幅1.5~2.5mの二か所ではほぼ直角に屈曲する溝を検出した。また、この溝の両脇には溝と平行して柱穴列が穿たれているが、その構造は詳らかではない。再建寺院の方位にはほぼ一致し、位置的にも再建寺院の西寺域を限る施設に関連する遺構の可能性が高い。また、この溝の西側に接して、3間×3間に復元できる掘立柱建物を検出している。さらに同調査区では、幅3.5m、長さ5m以上の埋土に多量の炭・灰を含む土壌を確認した。埋土および周辺から、銅滓・銅片・瓦片が出土しており、寺院に付属する銅製品鑄造に関連するものと考えられる。

その他、周辺では、弥生時代末~古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡等を検出しており、寺院造営直前まで集落が営まれていたことがうかがえる。

(叡滋賀県文化財保護協会 田路 正幸)



方形周溝墓検出状況

6. 大津宮の回廊は「複廊」

大津市錦織 大津宮関連遺跡

本調査は、大津市錦織2丁目の民家改修に伴う事前調査である。調査地は、大津宮の内裏南門に連なる回廊の所在が推定される位置であった。

調査は、昭和60年5月15日～6月11日まで、約100㎡を対象面積として実施した。

調査の結果、この地点では現地表下約50cmで大津宮の遺構面となり、調査地北端で柱跡の間隔が約2.7mの東西柱列を3基検出した。柱掘形は一辺1.2mの方形を呈し、柱は円柱で直径30cm前後かと推測される。

南門遺構を発掘した時に、回廊は掘立柱による三列の「複廊」であると推定されていた。その後の調査で北二列は確認された。今回検出した柱跡は、南側のライン上にあり「複廊」であったことを裏づける資料といえる。

「複廊」は、大津宮遷都前の前期難波宮に見られ、大津宮も同じ構造であったと考えられる。

今回の調査結果は、大津宮を解明するうえで貴重な資料として注目される。

その後、内裏正殿と内裏南門の間を調査する機会を得た。当調査地では、大津宮に関連する遺構は検出されなかったが、上層の整地層から平安末頃の瓦、下層からは弥生土器が出土した。

瓦は、以前紹介された三井寺の子院である尊勝院の類の寺院のものであると考えられる。

錦織地域では、主に平安～鎌倉時代、大津宮時代、弥生時代の三時期の遺構が検出される。

(勸励賀県文化財保護協会 氏丸隆弘・岩間信幸)

7. 新たな地方官衙か？

今津町日置前 日置前遺跡

日置前遺跡は、ほ場整備事業に伴い昭和57年度から継続して調査を実施し、本年度、遺跡の北東部にあたる地区の調査をもって終了した。

本年度の調査で検出された遺構は、I期(8世紀前半代)の竪穴住居1棟、II期(8世紀中葉)の掘立柱建物1棟、III～IV期(8世紀後半～9世紀後半)の溝等が検出された。

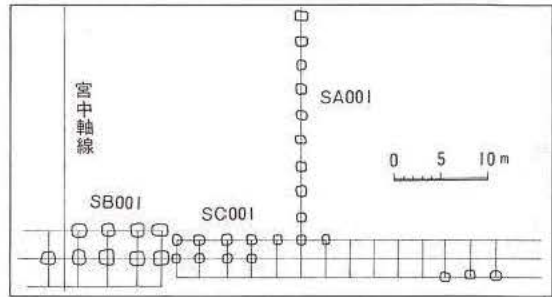
これまでの調査結果から、主軸方向をN-3°-EにもつII期の遺構は、条里の1町(109m)を基本的な単位として、方8町以上の規模という都市的な広がりをも



掘立柱建物



C区1号墳主体部(6世紀末)



大津宮内裏南門回廊略図

つ遺跡であることが確認されている。これらは、柵溝等によって区画されているが、全域が、こういった区画施設をもつのではなく、主要部分にのみ施行されたものと考えられる。詳細な検討は充分行っていないが、この方8町域を四分する形で、十字路が存在する可能性が強まってきた。つまり、II期の1町方格プランをもつ遺構から地割りを復元していくと、当遺跡の中心部に南北方向の14m程の余剰帯が生じ、この幅を除いた形で東西に1町方格の地割りが施行されており、この南北方向の余剰帯が、当遺跡の朱雀大路的なものとなるか、あるいは、北陸と畿内を結ぶ官道(北陸道)となる可能性がある。また東西方向にも同規模の余剰帯が存在する。

次に、柵等で区画された1町方格の区画内の建物には、備後国三次郡衙と考えられる下本谷遺跡政庁と類似した建物配置をとるもの、コ字形配置をとるもの、2間×2間の倉庫群によって構成されるものと考えられるもの、井戸等を伴い、各種建物群によって構成されるもの等があり、遺跡の西に近接して存在する日置前廃寺の存在も含め、II期の段階には、複数の地方官衙の機能をもった都市遺跡であったものと考えられる。(今津町教育委員会 葛原 秀雄)

8. 方形台状墓・後期古墳を検出

今津町福岡 妙見山遺跡

今津町内に位置する独立丘陵「妙見山」は、山中に多くの古墳が見られ、バイパスがこの一部を通過する。

これに先だち発掘調査が行なわれ、調査区内に3群の古墳が認められた。

北部で検出した1群は、円墳・方墳、主体部のみ認められるもの、計4基である。これらは、さらに北約200mに位置する湖西最大の円墳「大塚」を中心とする大塚古墳群の一面ととらえられ、群の最南端に位置する。遺構は後世の削平で、主体部・周溝の深部のみが検出される状態であった。(6世紀後半)

中央部での1群は、マウンドを残すものが4基以上認められ、このうち1基が調査の対象となっている。墳丘径11m、高さ1.1mを測る円墳で、主体部は、長辺に木板を使い、小口は20~30cmの河原石を積んでいる。これは、大塚古墳群で見られたのと同形式である。主体部より、土製小玉、鉄製品(鎌・刀子)、須恵器(蓋坏、壺(6世紀後半))を検出している。

南部では方形台状墓(弥生時代後期)3基を検出した。一辺10m~14mを測る。主体部らしい掘り込みは2基で検出したが、いずれも浅く、形状も明瞭でない。主体部近辺及び、周溝より鉄製品(刀子・鎌)を検出した。前年度の調査で、この一群の中に、7世紀中ごろの古墳が検出されたが、これとは接するものの、切り合わないことが判明している。

他に径約1mを測る円筒状の土壇を検出し、床面から弥生中期の甕がほぼ完品の状態で出土した。

また北部に一列に連続する土取り土壇がある。地山は黄褐色の粘質土で、おそらくは建築材(壁土等)に利用したものと思われる。埋土からは平安時代中期の遺物が出土している。

(湖沼賀県文化財保護協会 横田 洋三)

9. 湖西北部でも弥生時代中期の玉造り遺跡

今津町北仰 北仰西海道遺跡

北仰西海道遺跡は、昭和60年5月から北仰区グランド造成工事に伴い、調査を実施した。

前年度までの調査で、当遺跡は縄文時代晩期から弥生時代後期にかけての大規模な集団墓であることが確認されている。これまでに確認されている遺構として縄文時代晩期の甕棺墓65基、壺棺墓1基、ほぼ同数の土壇墓が検出された。棺として使用された土器は、晩期中頃(滋賀里Ⅲ式)から晩期終末(長原式)に限られている。これに対し土壇墓には晩期前半(滋賀里ⅠⅡ式)のものがみられる。こういった傾向は、同時期の集団墓である大津市の滋賀里遺跡にもみられ、現在



甕棺墓群



建物跡の全景

までに報告された県内の甕棺墓についても、晩期前半まで遡る例はみられず、いずれも晩期中頃以降のものである。当遺跡で検出された甕棺墓の良好な遺存状態の54例についてタイプ別にみると合せ口甕棺14例、被せ蓋甕棺33例、単棺17例であった。

土壇墓には、枕石に使用されたと考えられる石をもつもの、あるいは抱石葬と考えられる集石がみられるものがあり、耳栓、石刀、石棒等副葬品と考えられる遺物も出土している。また土壇墓の中には、長径で50cm前後の小形の土壇墓があり、小児も甕棺だけでなく土壇墓にも埋葬された可能性が考えられる。

甕棺、土壇墓とも、人骨の遺存状態は悪く、骨片が確認される程度で、性別、年齢等明らかにしえなかったが、4~5基を1単位として、いくつかのグループングが可能で、この単位の中には、同方位をもち、同じ埋置方法によるものがあり、同一家族の墓と考えられる。

弥生時代の遺構には、方形周溝墓、土壇墓の他、直径10mの円形焼失住居が1棟検出され、埋土及び周辺の土壇内より、中期(Ⅲ様式)の土器、碧玉原石、玉砥石、管玉未整品等が出土している。

(今津町教育委員会 江南久美子)

10. 荘館か富豪層の居館跡か

今津町弘川 末次遺跡

末次遺跡は、郷舎と考えられている弘川遺跡の東約700mに位置する。

調査は昭和60年7月から10月にかけて、今津町コミュニティセンター建設に伴う事前調査として実施した。

調査の結果、主軸方向を、N-10°E(Ⅰ期)とN-12°E(Ⅱ期)にもつ2方向の掘立柱建物群、柵が検出され、ともに2回ずつの計4回の建替えが行われたものと考えられる。

検出された遺構は、掘立柱建物14棟以上、柵8条以上が主要なもので、Ⅰ-a期の遺構として4間×6間、3間×5間の南北棟建物2棟と、これらを取り囲む形で柵が検出され、この区画の外に2間×3間以上の東

西棟建物2棟、1間×2間の建物1棟の計5棟が検出されている。I-b期の遺構は、2間×6間の南北棟建物4棟、1間×2間の南北棟建物2棟、2間×2間かと考えられる建物1棟の計7棟が検出されている。

II-a期の遺構は、4間×2間以上の建物1棟、II-b期は、3間×1間以上の建物1棟で、いずれも、南北棟の大型建物の可能性が高い。

これらの建物群は、いずれも柵を伴い、整然としたプランをもって検出されている。柱穴の掘方は30~50cmの不整形な円形で、柱痕は直径20cm前後の規模である。時期については、柱穴の埋土、包含層の出土遺物から、11世紀後半代を中心とする時期が考えられる。

遺跡の性格として、善積荘の荘園管理等にかかる建物群、あるいは富豪層の居館等がその候補として考えられる。遺跡の広がりについては、今回の調査では、明確にしえなかったが、検出された建物群は当遺跡の中心部と考えられ、一時期6棟前後のまとまりをもった建物群は、平安時代後期の在地の動向を知る上で極めて貴重な資料となりうるものである。

(今津町教育委員会 葛原 秀雄)

11. 弥生時代末期の神殿か

新旭町針江 針江川北遺跡

本年度の国道161号線高島バイパスに伴う調査は、昨年度に調査された針江北遺跡の北西に隣接する針江川北遺跡へと進展した。当遺跡は試掘調査の成果より中央部を除いて、第1区-針江北遺跡に隣接する部分、第2区-北方の吉武城遺跡に隣接する部分に分割して調査を進めた。

第1区の調査成果 第1区は針江北遺跡と包括して理解されるもので、バイパス内という線のな把握によると、南より、木棺墓-大溝(針江北SD6)-柵列(針江北SA1)-竪穴住居跡群-棟持柱建物及び掘立柱建物(針江川北SB1~4)-柵列(針江川北SA2)-竪穴住居跡群-大溝(針江川北SD1)-木棺墓群となる。この事実を面的理解へ拡大するならば、



円形柵列と棟持柱建物

針江川北SB1~4を中核として、その周囲に住居跡群、更に同一溝となる可能性の高い兩大溝を隔てて、墓域が広がるという環状の集落の姿が描き出される。

針江川北SB1、3は棟持柱を有する建物で、祭祀との関連(神殿的建物)が考えられる。SB4はその周囲に径約25m程の円形に矢板状柵列が廻り、祭祀を司る者、竪穴住居とは隔絶された村落の首長たる者の居住空間が想定される。当遺跡によって弥生時代末期の一集落形態が明確に把握されるものと思われる。

第2区の調査成果 第2区の北西半面においては、吉武城との関連が考えられる区画溝や雨落ち溝が検出され、数個体の漆器碗や土師皿、越前焼甕等が出土している。またこの近世の建物建設時に大規模な造成工事が行われており、その搬入土中より古墳時代初期(布留式土師器)の土器及び木器が多量に出土した。更に南東半面では古墳時代初期と考えられる5間×3間、掘方径約0.8mの大規模な掘立柱建物が検出されている。古墳時代の掘立柱建物は類例が少なく、時期の明確な把握等今後課題を残している。

(勸励賀県文化財保護協会 清水 尚)

12. 市遺跡発掘調査概要

愛知川町市 市遺跡

市遺跡は、県下第3位の愛知川によって形成された自然堤防上に位置する。昭和57年度より団体営は場整備事業に伴い遺跡の実態を把握するため発掘調査を行っている。

今年度の調査は、団体営は場整備、個人住宅建設に伴う発掘調査を行った。検出した遺構は、溝・土壌・掘立柱建物である。溝は、愛知、犬上、神崎の3郡にまたがり行なわれた条里制の方位と一致するものであり、前回の調査によっても同一方向の溝・畦畔が確認されている。これら検出した遺構を詳しく検討することにより条里の畦畔の姿も明らかになってくるだろう。また、溝の埋土中には、平安時代後期の土師器、黒色土器、灰釉陶器等が多量に包蔵されていた。掘立柱建物は、溝と方位を一致する3棟を検出した。

以上のようにこの地域一帯には、東へ31~32度傾く基軸をもつ奈良時代以降の条里が確認され、また、前年度の調査では、奈良時代以前のほぼ南北の基軸をもつ古条里の存在が確認されている。このことは、市遺跡周辺が奈良時代以前にはすでに開発され、中央の支配領域であったと考えられる。

今年度の調査では、この地域の条里制の畔畔の詳細な復元が可能になりつつあり、沓掛遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓が発見され、人々の定着は、大きく溯ることになった。

(愛知川町教育委員会 喜多 貞裕)